

ふれあい活カゆとり

## すみだ

# We!



## 両国地域の近代建築

両国駅の周辺には戦前に建てられた建物が残っています。これらは関東大震災からの復興のなかで建造され、昭和初期の雰囲気を含んでいます。今回はJR両国駅を出発して近代建築めぐりをしてみましょう。

JR両国駅の西口を出ると、時計と三つのアーチ窓が印象的な建物が見えます。これが昭和4年（1929）に建てられた駅舎（横綱一-3-20）です。関東大震災によって初代の駅舎が失われた後、仮駅舎を経て造られました。当時はターミナルであったこの駅にふさわしい、鉄筋コンクリート造の近代的な建



東京都慰霊堂（旧震災記念堂）

物です。壁面上端の線形と隅部の凹凸は建物表面に陰影をもたらす。時計周りや正面アーチ窓の下、意匠、窓周りに貼られたスクラッチタイルなどがモダンな印象を与えます。

駅を後にして国技館の前を進むと旧安田庭園につきます。その池のほとりから見えるドーム屋根の建物が両国公会堂（横綱一-12-10）です。設計者は台湾総督府（現・總統府）などの作品で知られる森山松之助で、大正15年（1926）に完成しました。曲面の壁にリズム良く並ぶ窓と、立派なドーム屋根を冠した姿は四季折々の庭園の風景とともに楽しむことができます。

旧安田庭園を北東に抜けると横綱町公園があります。ここは関東大震災の時に多くの犠牲者が出た陸軍被服廠跡で、復興にあたって犠牲者のための慰霊堂

と、災禍と復興を後世に伝えるための記念館が造られました。

東京都慰霊堂（旧震災記念堂、横綱二-3-25）は昭和5年（1930）に竣工した、三重塔と講堂からなる建物で、築地本願寺などの設計も手掛けた建築史の大家・伊東忠太によって設計されました。彼は日本風の意匠を求められましたが、伝統にとらわれ過ぎず個性的な建物を造りました。例えば講堂は正面を唐破風とし、建物の柱の上には組物をのせるなど日本風ですが、その内部はバシリカ方式のキリスト教教会との類似を見ることができ、三重塔の相輪はインド風となっています。なお、伊東の設計した建物には彼独自の「怪物」が見られることが多く、この建物にも屋根の上、組物、講堂内部の扉の上にありますので、探してみてください。

東京都復興記念館（横綱二-3-25）は昭和6年（1931）に建てられました。この建物の設計にも伊東が関わっていると考えられ、やはり正面の柱の上に「怪物」がいます。スクラッチタイル貼りの建物は洋風でモダンに見えますが、端が反った出の短い屋根底とその下の組物を思わせる持送りが日本的な印象も与えます。建物内部には震災・

戦災関連の展示がされており、この展示物と展示方法に合わせ、1階は側面の窓から、2階は天井に設けたトップライトから光を採り入れる工夫がなされています。

今回見た建物たちはほぼ同じ時期に建てられ、どれも特徴的なデザインを持っており、見比べると面白い発見があると思います。また、これらは関東大震災後に建てられ、戦災もくぐり抜けた、二度の復興を見てきた建物たちです。東日本大震災からの復興に取り組む今、かつての災害とそこから現在の町をつくった人々のたくましさを感じながら歩くのも感慨深いのではないのでしょうか。



東京都復興記念館

（墨田区文化財調査員 米澤 貴紀）

訂正 前号の「隅田川沿いの寺社建築」の記事中、「弊殿」は「幣殿」の誤りにつき訂正し、ここにお詫び申し上げます。

# 七不思議～本所の町と江戸の怪談～

すみだ郷土文化資料館専門員 高塚 明恵

日本で言うところの七不思議とは、ある場所や地域にまつわる常識が及ばない不思議な話や、恐ろしい話を七つ集めたものです。十八世紀半ば以降、諸国の七不思議が江戸に伝わると、江戸の各地でも七不思議がまとめられるようになります。

本所の七不思議はそのようにして成立した江戸の七不思議の中でも、最も有名で現在まで語り伝えられている七不思議の一つです。七不思議を形成しているそれぞれの話は、もともと別々に語られていたことが、江戸時代に出版された書物からわかります。それが「本所」という地域でひとくくりにされたのは江戸時代終り頃のことです。現在では、本所七不思議として、九つの話が伝えられています。

・置いてけ堀  
本所のとある堀（御竹蔵付近・現錦糸町駅付近・現錦糸堀公園付近等）で魚を釣り、帰ろうとすると「置いてけ、置いてけ」と怪しい声をする。



本所七不思議之内 置いてけ堀

・灯り無蕎麦  
本所南割下水（現北斎通り）近くに、灯りのついていない無人の蕎麦の屋台があり、客が店主を待つが、一向に帰ってこない。行燈に灯りをつけようとしてもすぐに消えてしまう。客はあきらめて帰るが、その後凶事に合う。

・片葉の葦  
留蔵という男が、お駒という女性に振られた腹いせに片手足を切り落として殺して堀に投げ込んだため、駒留橋（現両国橋袂）付近の堀に生える葦は、片方しか葉をつけない。

・足洗い屋敷  
本所の旗本屋敷（一説に三笠町、現亀沢三丁目付近）にあった味野家では、毎晩天井から汚れた大足が付き出てきて「足を洗え」と騒ぐ。腰元たちが綺麗に洗ってやると、引つ込むが、手を抜くと暴れる。屋敷の主はたまりかねて朋輩と屋敷を変えるが、その後は怪異が起こらない。



本所七不思議之内 足洗邸

・津軽の太鼓  
火事を知らせる際に、町方では半鐘、大名家では板木を叩いていたが、弘前藩津軽家上屋敷（現緑町公園一帯）では太鼓をたたいて知らせていた。

・落ち葉なき椎  
本所御蔵橋北にある平戸新田藩松浦家上屋敷（現同愛記念病院付近）にある椎の木は、落葉しない。

・馬鹿囃子  
夜になると、どこからともなくお囃子が聞こえてきて、遠くで聞こえたと思ったら、すぐ近くで聞こえたりする。

・送り拍子木  
入江町（現緑四丁目付近）の時の鐘付近で夜回りをしていると、どこからともなく拍子木の音が聞こえる。

・送り提灯  
夜更けに本所出村町（現法恩寺橋付近）あたりを歩いていると、前方に明りがみえ、近づくと消えてしまう。

当時、本所には堀割や川が縦横に流れていました。「置いてけ堀」「灯り無蕎麦」「片葉の葦」は本所の町の水辺を舞台にした話です。



本所七不思議之内 送り提燈

また、御家人や旗本の屋敷や、大名屋敷が立ち並ぶ街でもありました。「足洗い屋敷」「津軽の太鼓」「落ち葉なき椎」の舞台は武家屋敷の中です。その生活は庶民には容易にうかがい知ることができず、かえって怪異を連想させるものであったのかもしれません。

「馬鹿囃子」「送り拍子木」「送り提灯」は音や光の怪異ですが、整然とした碁盤目のような街並みは、灯りの乏しい夜道では遠近感を失いやすく、不審な物音や人影に驚くこともあったのでしよう。

本所七不思議としてまとめられた話には、堀割や川が縦横に流れ、整然と武家屋敷が立ち並び、田畑に隣接する江戸時代の本所の町の様子が表れているのです。

画像

いずれも岡田国輝（三代歌川国輝）画 明治19年（1886）